

# ラグジュアリーな恋人

*Asuka & Takamichi*

---

日向唯稀

*Yuki Hyuga*

Eternity



エタニティ文庫

1

「もういいって。俺、お前と一緒にいると、惨めな気持ちになる。終わりにしよう」  
伊藤明日香が恋人からそんな言葉を告げられたのは、大学を出たばかりの春のことだった。

あれから三年半——明日香は「もう、恋なんてしなくてもいい」と思っていた。  
仕事に恵まれ、仲間に恵まれ、女友達にも恵まれていた。

実際仕事は忙しいし、仲間や友達との付き合いで、一日一日があつという間に過ぎていく。

恋人という存在に心が潤わされることがない代わりに、拘束されることもない。

特別意識しなければ、そのまま時間だけが過ぎていく。

結婚だって、まだまだ考えなくてもいい年だし——

「これより新郎新婦によるケーキ入刀を行います」

ただ、そうは思っても勤め先がシティホテルの宴会課。

明日香の主な仕事は、メインホールでの結婚披露宴の配膳や進行だった。

「カメラをお持ちの方は、どうぞ前へ」

土日、祝日を合わせて、少なくとも毎週四組から六組の披露宴に携わっている。

(このドレスも素敵)

人生で今が一番輝いているだろう新婦を見ると、やはり完全にスルーはできない。

恋人がほしいとは思わなくても、結婚披露宴だけはしてみたいという、ちぐはぐな願望だけが育っていく。

だが、そんなことを考えていた瞬間だった。

「それでは、ケーキ入刀です。新郎新婦にどうぞ大きな拍手を——!？」

ガシャン!! と、裏から料理カグラスか、とにかく何かを派手にひっくり返したような音がした。

それに場内で待機していたスタッフたちも驚いたのだろう。本来ならケーキ入刀を合図に、いっせいにコルクを抜かれるはずのシャンパンが、ボン、ボン——ボン、ボン!?! と、不揃いな音を響かせる。

(うっそっ。この一番大事なときに)

しかも、「すみません!」という余計な悲鳴まで場内に響いて、これには来賓のみならず新郎新婦の意識までもが、場内からは見えない裏へ行ってしまった。

ケーキ入刀から乾杯までの披露宴冒頭の大きな見せ場が一気にシーンとなる。こうなると頼りは進行を預かる司会者によるアドリブトークだけだ。

(司会者っ、司会者っ、どうにかしなさいよっ。この空気!)

しかし、こんなときに限って、司会は新郎新婦の友人だった。

それも、初めての大役にドキドキしながら紙に書かれたことだけを忠実に読み上げていた状態だ。

(あ、終わった。いや、ここで終わらせるわけにはいかないわ。どうにかしなきゃ。リニューアルオープンしたばかりだっていうのに、ネット上に酷評が駆け巡っちゃうもの)

明日香は、新郎側の両親卓の担当をしていたため、高砂からはもっとも遠い場所にいた。なので、まずは新郎の両親、親族に謝罪してから、急いで司会者のもとへ向かった。が、明日香がたどり着く前に、裏からはクラシクタキキシードに身を包んだ男性が出てきた。「大変失礼いたしました。当ホテル、エストパレ・東京ベイの副支配人を務めております、東宮と申します。このたびは新郎新婦さまのご結婚に祝福を申し上げますと同時に、ただいまの失礼を心よりお詫び申し上げます」

この大広間の責任者ではなく、おそらく偶然通りかかったか何かだろう、副支配人の東宮貴道だ。

甘い美声に、芸能人も顔負けの端正なマスク。そして何より副支配人というポジションからは想像もできない若さに、場内の女性客がまず溜息を漏らした。

「本日の新婦様がとても美しいと聞いたスタッフの一人が動揺し、皆様には大変なご迷惑をおかけしてしまいました。本人も十分反省をしておりますが、この先また同じ失敗をしても困ります。つきましては、一度本人より謝罪をさせていただくとともに、彼が気になって仕方がないと申します新婦様を拝顔させていただければと思いますが、新婦様、お許しいただけますでしょうか」

しかも、突然何を言い出すのかと思えば、しらけたムードを今一度わかせるためのアドリブだ。

新婦を褒め、新郎に話をふることで、新郎新婦の友人たちの笑いを誘い、同時に主賓席の者たちの興味を誘って、この場の主役が誰なのかを明確にしていくな。

「は、はい」

「心優しい新郎様、ありがとございます。では、ご許可が出ましたので。さ、お詫びを」  
そうして裏からミスを犯した——と、設定された社員が現れた。

「このたびは、本当に申し訳ありませんでした」

「これでもう、落ち着いた？」

「はいっ。すごく綺麗なお嫁さんです。裏で仕事、頑張ります！ 本当に申し訳ありま

せんでした」

深々と一礼し、謝罪をしたのちに、東宮とのノリのいいやり取りで、場内をわかせる。「それでは、改めて新郎新婦さまにケーキ入刀をお願いしたいと思います」

思いがけないハプニングではあったが、どうにか、これも思い出のひとつに変わりそうだ。

明日香もホツとし、今度は慌てて所定の位置に戻る。

（へー。なかなかやるじゃない、東宮副支配人。クールな顔のインテリだから、てつきり洒落や冗談は口にしませんってタイプかと思ったのに、ちゃんと道化役もできるんだ）  
会場では改めてケーキ入刀からやり直し。

明日香たち配膳のスタッフが、シャンパンを来賓のグラスに注いで回り、乾杯の音頭までを東宮が進行することで、どうにか披露宴の軌道修正ができた。

祝辞を述べた新郎側の主賓の機転、話術にも救われ、今回のハプニングは新郎新婦にとって初めての試練であり、人生の一部、それを乗り越えられたものとして上手くまとめられ、その後はラストまで何事もなく終えることができた。

ただ、これだけだったら、明日香も東宮という男に対して、特別な感情を持たなかった。管理職のわりには使えるじゃん——

失礼な話だが、それぐらいの印象で終わっただろう。

だが、そこで終わらなかつたのは披露宴の終了後、裏で起こった更なる一幕のためだつた。

「はー。どうなることかと思つたけど、上手く収めてもらつてよかつたな」

「かえって盛り上がつてたし、セーフって感じ!? むしろ俺のおかげで、一生忘れられない披露宴になつたかもな」

実際失敗したのは、土日限定で入っている学生派遣員スホットで、場内に謝罪に出てきた社員ではなかつた。

そこはまあ、嘘も方便だ、仕方がないにしても、明日香が思わずキレたのは、失態を犯した本人の無責任な発言だ。

「——なつ、あんたたちね」

この場で一発殴つてやるという気持ちになる。

「君、どこの配膳会社?」

しかし、憤いきどおる明日香より一歩早く声をかけたのは東宮だつた。

特に憤慨いきどおしている様子は見せないが、だからといって笑っているはずもない。

「あ、はい。大崎配膳おほさきです。さつきはすみませんでした」

さすがに副支配人おほさきに声をかけられ、当人も身体を二つに折つた。

「そう。大崎配膳ね。なら、君はもう帰つて。あと、今後大崎配膳から当ホテルへの派

遣はいつさい受け付けないから、そのつもりで事務所の社長には謝罪でも言い訳でもして」

「え!? それは、どういうことですか。俺が帰れつて言われるのはわかりますけど、どうして会社まで」

さらりと告げられた言葉に、その学生スポットは真つ青になる。

だが、当人だけではない。これには明日香も、周りにいたスポットや社員も啞然あぜんとした。「そんなこともわからない人間に、当ホテルの制服は着せられない。そして大崎配膳が、この程度の教育しかできない事務所だとわかつた以上、怖くて契約は続けられない。それだけだよ」

しかし、周りがどんな反応を示そうと、東宮は淡々と説明するだけだつた。

「つ、ちょっと待ってくださいよ。それってなんか、俺が全部悪いみたいじゃないですか。他の連中の分まで、俺のミスと一緒にたにして、この際処分つてされてる気がするんですけど」

ここまで言われても、まともな謝罪ができない。むしろ、保身に走る学生に対して、明日香もあきれて物が言えなくなつた。

「なら、そう思つておけばいい。ただ、これだけは言っておく。ホテルにいらしたお客様にとつては、社員も君たちバイトもこのホテル・エストパレ・東京ベイの人間だ。決

して社員だから、バイトだからという区別はしていないし、それによって評価を変えたりもしない。今日の失敗に対しても、批判はホテルが受けるし、責任を問われるのもホテルだ」

こんな自分の失敗を反省しないような学生相手に言ったところで、通じるかどうかはわからなかった。

しかし、東宮は淡々と説明を続けていた。

「そして、このホテルから見た場合、君は大崎配膳が送ってきた人間であって、当社が直接雇っているわけではない。つまり君の言動や働きそのものが大崎配膳の評価になるということだ。たとえ、君にその意識がなかったとしても、それは大崎配膳の教育が悪い。はじめに教えるべきことを教えていない。まったく心構えのなっていない者を送ってよこしたのだから、その責任は会社が負うべきだろう」

それは日々現場に立つ明日香も、口を酸っぱくして、言っていることだった。

理解する者もいれば、煙たがる者もいる。だが、心から理解して現場に立つてほしいから、明日香は何度も同じことを言い続けてきた。

自分もつい最近まで派遣という立場だったので余計にだ。

派遣経験のない社員が言うど角が立つが、自分が言うにはまだ——ということもあって、ときには憎まれ役も進んで買ってきた。

が、それでも東宮ほどはっきり言えるかと聞かれれば、それはノーだった。

「そんなっ、そんなこと言ったら、ミスをした奴の会社は全部出入り禁止ですか？ だったらこの前、別の会社の奴だって！」

配膳事務所との契約は、宴会課の一存で決めているのではなく、その他の部署もかわっていることだ。

スポーツ一人に対しての時給設定なども考慮しなければならないし、宴会課から「事務所を替えられないか」という打診はできても、決定はできない。

この場での即決など論外だ。

これは、東宮の立場だからできることだ。

「あのね、披露宴は当事者たちにとって、一生に一度のものなんだよ」

だが、ここまで説明されても心から謝罪をしない学生に、とうとう東宮の顔つきが変わった。

声色も語尾もきつくなり、学生も口を噤む。

「どんなに君たちや我々にとって日常的な仕事であり、イベントであったとしても、当事者にとっては、かけがえのない宴だ。また祝福に來た來賓にとっても、それは同じことなんだ」

だからといって、東宮の静かな説教は止むことがない。

「人が人であるかぎり、ミスをしなさいことはない。ときには社員だってミスをするし、私にしたってそれは同じだ。だが、そのことに對して、心から反省できない者、また、自分の犯したミスがどういふものなのか、そもそも理解しようとさえしていない者は論外だ。君は、お客様の大事な記念の場で、大きなミスを犯した。そこまですら私も二度とないように注意をするだけだ。しかし、君はミスを犯した直後、謝罪しながら笑っていた。その上、先ほどの発言だ。たとえバイトであっても、仕事を仕事と思っていない人間に、当社は用がない。それだけだ」

それが彼のポリシーであり、サービス精神のあり方なのだろうが、明日香にはこの場を使って、東宮が全員に語りかけているようにも思えた。

今一度、自分の仕事は何であるか、考えてくれ。そして、見直してみてくれ——と。「一度、自分と置き換えて考えてみることだね。今日の披露宴の新郎が、君や君の家族だった場合、失敗した君の言動をはたして許せるものなのか。まあ、君なら許せるのかもしれないが、当ホテルからすると、論外なのでね。じゃあ、もういいから帰って。ここから先の話は、大崎配膳とするから」

ここまで言われると、学生もそれ以上何も言えなくなり、肩を落として「わかりました」と言い、その場を去った。

「言った……。言い切っちゃったよ」

「え。でも、これって真面目にやってきた奴まで出入り禁止!？」

しかし、これですべて良しなのかと言えば、そうではない。

その場にしゃがみ込んで泣き始めた大崎配膳の女子大生スポーツたちを見て、明日香はこの場から去っていく東宮を追った。

「東宮副支配人、待ってください」

「何？ 伊藤さん」

これまで直接話したことはほとんどないのに、きちんと名前を覚えられていたことに少し驚いた。

が、今はそれどころではない。

「東宮副支配人のおっしゃることはわかります。私もまったく同意見です。でも、大崎から来てる子の中には、リニユーアル前から頑張っている子もいます。一生懸命、仕事をしてきた子たちも、少なくありません。このエストパレ・東京ベイにも愛着を持って勤めてくれてるんです。なので」

明日香は、現場で常にスポットと一緒に仕事をする立場だ。このまま何もしないわけにはいかなかった。

バイトとはいえ、懸命に勤めてきた子たちを見てきたのに、無視はできない。

しかし、東宮は笑って言った。

「だったら、そういう子たちには事務所を替えてきてもらえばいい」

「え」

「都内にはかなりの数の配膳事務所がある。うちに入っている事務所は他にもあるわけだから、そこに移って、引き続き来てもらえばいいんじゃない？」

「っ、でも……。そういう子たちは、所属事務所にも愛着があると思うんですけど……」

ただ、自分が泣き崩れた彼女たちの立場だったら？ という想像でしか答えられなかった。

「そこまでは責任を負いきれないよ。ただ、君の言う当社に愛着がある子たちが、今後もうちを派遣先にと希望してくれるなら、事務所を替わってもちゃんと受け入れるから。君もその人たちの話を聞いてあげて」

「……っ、でも」

いまいち納得ができない明日香に、東宮は再び険しい表情をし、そっと顔を近づけてきた。

周りには漏れないよう気を配り、明日香にのみ聞こえるように真意を明かす。

「これぐらいの対応をしなかったら、事務所側の怠慢が改善されることはない。十分育てていない人間を、数合わせで放り込んできていることぐらい、君ならわかるだろう」

(！)

それは、本当なら現場を預かる社員から出て、然るべき意見だった。

だが、実際は意見ではなく、愚痴で終わっている。

派遣元がまともに育てないなら、自分たちが育てるしかない。そう半ば諦めつつ、毎回一人は紛れ込んでくる初心者を教えている状態だ。

それほど人数を揃えることに苦労しているのだ。

猫の手でも借りたいときなら、数合わせとわかっただけでも受け入れるしかないのが現状だ。

それでも、裏で雑用係として使ってさえ、今日のようなことが起こるとなると、さすがに見て見ぬふりはしていられない。

「横暴だと罵倒しても構わないよ。それでも私は、お客様の立場になってサービスできない者を、サービスマンとは認めない。教育できていない者を平気で送ってくる事務所を、配膳人の派遣事務所とも認めない。君だって本当はそう思うだろう？ 元・香山配膳の伊藤明日香さん」

誰かが改善しなければ、真面目にやっている者たちが損をする。

それ以前に、お客様にも迷惑がかかる。

これは至高のサービスを提供するホテルとしては、断じて見逃せないことだ。



だからこそ、東宮は強硬な手段に出た。

そして明日香ならその考えを理解し、賛同してくれると思っっているのだろう。

(東宮副支配人……………)

言葉がうまく出なかった。けれど明日香は、東宮への賛同を、今後の仕事で示そうと思つた。

まずは今回のことで、とばっちりを受けるだろう大崎配膳からのスポットの救済をし、そしてこれを機に「当社が必要とするサービスマンの基準はここなのだ」と明示して他の配膳事務所とも渡り合つていこうと。

「じゃあ、あととはよろしく。私はこれから総支配人に同行してもらつて、謝罪に行かないきゃ。あれで済んだとは、さすがに思つてないからね」

そして、心からのサービスができるスタッフを育てることで、東宮が目指しているであろうこのホテルの宴会課の形、サービスの形を、現実のものにしていこうと思つた。

(——結局、何を言つたところで、最後に責任を負うのは上の者。ホテルを代表しての謝罪となつたら、彼や総支配人が頭を下げることになる)

ただ、この一騒動があつたことで、その後の宴会課には、目に見える変化が起つた。「東宮副支配人つて、なんかカッコいいな。同じ男から見ても、一本筋が通つてゐるか、なんていうか」

「うん。異性から見たら、なおさらよ。遠くから見ているだけでも十分カッコよかったけど、見かけだけじゃないところが、本当にいいわ。ね、そう思いませんか？ 明日香さん」  
それまであまり近いとは言えなかつた副支配人の東宮と、宴会課で働く者たちの距離をグッと近づけたのだ。

「そ、そうね。確かに、すごく立派な方ね。東宮副支配人つて」

明日香にしても、自然と彼の仕事や彼自身を目で追うようになった。

(お客様の立場になってサービスできない者を、サービスマンとは認めない。教育できない者を平気で送ってくる事務所を、配膳人の派遣事務所とも認めない。君だつて本当はそう思うだろう？ か……………)

そして、人知れず胸をときめかせるようになった。

(まあ、立派すぎて、私には見るだけがちょうどいいって感じだけだね)

それでも仕事もプライベートも充実していた明日香にとって、東宮は見ているだけで十分な存在だった。

むしろ見ているだけのほうが、心から楽しめる存在であつたが——

爽やかな春風に乗って、桜の花びらが舞い散る四月のはじめ。

明日香は社会人となって丸四年が過ぎ、五回目の春を迎えていた。

「ふん〜」

朝の目覚めがいいというだけでも、機嫌が良くなる今日この頃。

新東京副都心・台場にあるホテル・エストパレ・東京ベイにも朝日が燦々と当たり、輝いて見える。

「ご機嫌ですね、明日香さん。何かいいことでもあったんですか」

よほど春めいたオーラでも出ていたのか、休憩室の自動販売機の前に立ったとたんに声がかかった。

相手は和室の宴会場専門で来ているスポットの凜子。

着物姿におかつは頭が、なんとも楚楚とした雰囲気醸し出している現役女子大生。土日、祝日だけでなく平日の夜も来ている、スポットといえども、頼りになる存在だ。

「まあね。あつたというよりは、これから起こるのかな」

明日香は気心の知れた凜子に、ちよつともつたいぶって見せた。

「——え？ 明日香さんが浮かれてる!? ってことは、今夜あたり岩谷課長の奢りで飲み会ですか？ だったら俺も連れていってくださいよ」

そう広くもない休憩室だけに、二人の会話を耳にした他のスポットも声をかけてきた。「なにそれ。私が浮かれるのは、そんな時だって言いたいのか？」

「あはははつ。言ってみただけですよ。でも、飲み会あるなら参加希望なんです」お調子者でルックスの良い彼の名前は海斗。

ホテルの制服は、どんな男子でも三割増しは良く見せるスタイリッシュなものだが、彼は本人のルックスがずば抜けていた。

長身な上にダンサー志望で常に身体を鍛えている。そのため、数多くいる男性スポットの中でも、海斗は群を抜いて目立つ。

そんな彼が「飲み会」と口にしたものだから、すっかり周りもその気だ。

おそらく今夜は仕事が終わったなら、気の合う仲間いつもの居酒屋に直行だろう。「あ、そうか。今夜の大広間、那賀島建設のパーティーだ。さつき他の子も騒いでたけど、来賓の中にDがいるんでしたよね。確か、那賀島建設のCMソングに新曲が起用されるとか。明日香さん、それで浮かれてるんじゃないんですか？」

「D? ああの売れっ子ミュージシャンの!?!」

「そう、その『D』！」

凜子が明日香のご機嫌な理由を言い当てると、どうしてか周りが騒ぎ出す。『D』という、まるでイニシヤルのような名は、最近人気の男性ミュージシャンのものだ。どうでもいいじゃない、私の機嫌がいい理由なんて——

そう言いたいところだが、妙に盛り上がっていて、なんだか恥ずかしくなってくる。理由が理由だけに、やっぱり大人げなかった？　と思えて。

「は？　凜子。どこかの素人スポットじゃあるまいし、国賓クラスの接客もしてきた明日香さんが、芸能人ごときに浮かれるはずないじゃないか。ねえ、明日香さん？」

そう言われたら、昨夜から浮かれていた明日香は、ますます身の置き場がない。

「うっ……浮かれちゃ悪い？　っつか、海斗。何か私のこと誤解してない？」

買ったばかりの缶のコーラを手中で転がし、ぼそっと言り返す。まるで、恋の話をするかのように頬を赤らめた明日香に、海斗は「えー」と声を上げた。

休憩室内にいた二十人ほどがいつそうざわめき立つ。 「それ、マジですか。全然イメージが湧かないですよ。あの香山配膳出身で仕事バリバリの明日香さんが、芸能人に……、それもミュージシャン相手に浮かれるなんて」

真顔で言う海斗に、明日香はようやく皆が言いたいことを理解した。

「それとこれは関係ないでしょう。もちろん、仕事に支障は出さないけど……。ちらっ

と見て楽しむぐらい、私だってするわよ」

明日香はこのホテル、エストパレ・東京ベイのリニューアルオープンに合わせて半年前に正式に社員になったが、その前は海斗や凜子たちと同じスポットだった。

なので、彼らとはこうして名前で呼び合う仲だし、仕事が終われば食事や飲み会もする。社員の中では間違いなく一番スポットたちと仲がいいだろう。

ただ、それでも海斗や凜子たちは、明日香を常に立ててくれる。

それは明日香が年上だから、自分たちより経験が豊富だからということではなく、彼女が所属していたのが『香山配膳』という業界屈指の派遣会社だったからだ。

学生アルバイトや兼業の募集はいっさい行わない香山配膳は、この道のプロと呼ばれる配膳人だけが登録できる事務所だ。

その徹底したサービス精神と仕事ぶりには定評があり、依頼先は引く手あまたで、誰の目から見ても他の配膳事務所とはレベルが違う。

それこそ、ホテル業界で働いて何十年という者たちからさえ、「香山配膳に入るのには、一流ホテルの社員になるより難しい」「一流ホテルの社員であっても、香山配膳に転職できるとは限らない」と言われるほどの事務所だ。

だが、いくら明日香が大学卒業後、その香山配膳に三年半ほど在籍していたとはいえ、芸能人相手に浮かれるはずがないというのは、周囲の勝手な思い込みだ。

「なら、披露宴のサービスをしながら、何度見ても飽きないわ〜とかって言ってるのも実は結婚願望の表れだったとか!」

「ここぞとばかりにからかってくる海斗に、明日香は頬が引きつった。

「そもそも私を『普通の女』として見てないんじゃない? という疑惑さえ浮上する。

「それは結婚願望じゃなくて、結婚披露宴願望」

「それならこの際とばかりに、明日香も主張した。

「私だつて一応、女よ。そりゃ現場に入ったら、男勝りかもしれないけど、ウエディングドレスに憧れぐらい持つてるわよ、と。」

「結婚披露宴願望?」

「そう。相手がいなくなつて、憧れるぐらいいいでしょう?」

「え? 明日香さんつて、岩谷課長と付き合つてたんじゃ……」

しかし、話はずますおかしなほうに転がっていく。

「は!? 私が岩谷課長と? どうしたらそんなことになるわけ?」

突然持ち出された直属の上司、宴会課の課長である岩谷との交際話に明日香が驚く。

「馬鹿っ」

「だつて」

凜子が舌打ちして海斗をなじつた。

別棟にある和室に勤める凜子がこんな反応を示すということは、かなり広範囲にわたつて広まっている話のようだ。

明日香は、これはただ驚いている場合ではないと直感した。

「やだ、はつきり言つて。変に誤解されてると岩谷課長にも悪いし、士気にもかかわるわ。凜子もそう思つたの? それつて、私がそういうふうに接してるように見えたりしてこと?」

この場には良くも悪くも人が揃っている。スポットも社員もいる。

ならば、ここではつきり誤解を解いておけば、噂は自然消滅するだろう。

そういう意図もあり、明日香はその場の全員に聞こえるような声で凜子に問いかけた。「——いえ、全然。私は、ありえないつて思つてました。そもそも明日香さんは誰に對してもざつぱらんな対応をするし、男女の隔ても上下の遠慮もなく接する人だから。ただ、香山を辞めてまでここに入ったつてことで、もしかしたらつて思つた人がいるんじゃないかなつて。ほら、ここに明日香さんを引つ張つたのが岩谷課長だつて話があるから、そのせいだと思ひます」

「またもや香山配膳出身というのが原因だつたらしい。こうなると香山配膳の評価が高いというより何か妄信めいたものを感じる。」

「え!? じゃあ、もし私を誘つたのが社長だつたら、私は社長の恋人とか愛人とかつて

ことになっちゃうわけ?」

「たぶん、そういう発想をする人もいるかも」

「すっごい。なんか、そういう噂話を聞くのって新鮮。へー、そうなんだ」  
呆れも通り越して、ただおかしい。

「明日香さん」

嘘も隠し事もない明日香の態度に、海斗が力の抜けた声を漏らした。

「ほら、だから言ったじゃない。明日香さんはそんな理由で仕事を選ぶ人じゃないって。岩谷課長が土下座したとか、泣きついたとか、そうやって同情を誘ったんならまだ理解の範囲内だけど」

凧子にいたっては、香山配膳のブランド力より明日香自身への思い入れが強いのか、これはこれでどうかという台詞せりふを公然と放つ。

「は? 俺がどうかしたか」

噂をすれば影とはよく言ったもので、当の岩谷本人が休憩室に現れた。

もともと休憩室の扉はフルオープン。今の話も廊下まで丸聞こえだっただろう。岩谷の問いかけがわざとらしい。

怒っている様子はないにしても、何をくだらない話をしているんだというニュアンスを含んでいる。

「いえ、なんでもありません。私、時間だ。戻らなきゃっ」

「あ、俺も。失礼しました」

これにはさすがに慌てたのか、凧子と海斗の二人が席を立った。

作り笑顔でその場をごまかすと、仕事にかこつけて去っていく。

「しょうがねえな、あいつらも」

そう言いながら二人の後ろ姿を見送る岩谷は、三十代半ばの熱血型のホテルマン。

もともと体育会系の彼は、長身で体格もよく、黒服と呼ばれる礼服を着用するととても厳いつく見える。

これで蝶ネクタイを外してサングラスをかけたなら、要人に付き添うSPか、繁華街に出没する怖いお兄さんだ。

打ち解ければ頼りがいのある兄貴分だとわかるのだが、そこにいたるまでに時間がかかることから、管理職としては苦勞が絶えない。

彼が明日香を社員に誘ったのも、そんな自分をフォローする人材がほしかったのが一番の理由らしい。

凧子の想像もあながち外れておらず、「頼む」を連呼したことは間違いない。

「それよりどうしたんですか? 休憩室に現れるなんて珍しいですね」

「あ、お前を捜してたんだよ」

「私ですか？」

そして、そんな岩谷が相手であつても、まったく物怖じしないから、明日香は周りから誤解を受ける。

明日香は特に大柄でもなければ、迫力ある美人でもない。

年相応のごく普通の女性——よりは、若干整っているだろう程度のルックス。だが、明日香は仕事に入ったとき、表情が大きく変わる。

今も話し相手が岩谷になったとんに、目つきも口調もシャープなものになった。

数分前まで、今日は好きな芸能人が来るのよねと浮かれていたことなど、誰も思い出せないほどだ。

「そう。今日的那賀島建設のパーティーだけど、オールウェーターになったんだ。だからその時間帯からラストまで、桜の間に回ってほしい」

その上、聞き捨てならないことを言われて、明日香の顔つきが更に変わった。

真剣を通り越して、明らかに険しくなっている。

「は？ オールウェーター。今時、どんな男尊女卑ですか、それは」

思い切り、何それ！ という彼女の返答ぶりに、休憩室が凍り付いた。

それもそのはずだ。那賀島建設といえば、Dが来るパーティー。

さっきまで減多に見ることのないほど明日香が浮かれていたのを知っていた周りの

人々は、「それはまずいですよ、課長！」と内心叫んでいた。

「男尊女卑って言うなよ」

「それってお客様の希望ですか？ だとしても、一番人手のいる大広間でオールウェーターをやるってことが、どういうことかわかっているんですよ？」

しかし、明日香が表情を変えた一番の理由は、会えると思っていた芸能人のことではなく岩谷が発した「オールウェーター」という言葉のほうだった。

オールウェーターは文字どおり、男性スタッフだけでサービスをするというスタイルで、ある種の最高レベルのサービスだった。

このエストパレ・東京ベイで言うなら、全員が黒服と呼ばれる黒のスーツに蝶ネクタイ着用で接客に当たる。つまり黒服を着られるレベルの各宴会部屋の責任者やサブクラスのサービスマンが、たった一つの部屋に集められて、サービスを提供するということだ。あくまでも、人が足りないから今日だけスポットに黒のジャケットを着せてしまえ、などというふざけたことがなければだ。

「いや、それはその……」

とはいえ、本日これから行われるパーティーや披露宴の数を考えると、明日香はそのふざけた黒服スポットの可能性もなきにしもあらずだと思つた。

各部屋の黒服をいっせいに大広間に連れていかれたら、残された部屋は誰が管理・進

行するといふのだ。

仮に、各部屋の黒服はそのまま、一般制服の中でもレベルの高い男子を大広間に集めて今日だけ黒服ということにしても、連れていかれたほうの部屋はお手上げだ。

この大穴を大広間から外された女子だけで埋めろというのだろうか？

外される女子のレベルはピンキリだというのに？

かといって、レベルの低い男子に黒服を着せて大広間に集め、「これがこのホテルの最高レベルのサービスだ」と言うつもりだとしたら許せない。明日香の目つきは悪くなる一方だった。

「岩谷課長。わかりきったことだと思えますけど、今日の宴会は大広間だけじゃないんですよ。そんなふざけたスタッフ配置をしたいなら、披露宴の少ない平日の仏滅にでもやってみてください。何を考へてるんですか。それともいい年して、エイプリルフールですか？ 四月馬鹿ですか？ 返答によっては、ただの馬鹿ですか？ って聞きますよ」

明日香は周りの目を気にすることなく、岩谷に噛みついた。

どんなに平静を装っても、「そんなサービス、冗談じゃない。ふざけないでよ」という怒りが言葉の端々からにじみ出る。

これでは、なんのためにリニューアル時に更なるサービスの向上、ゆくゆくは日本一を目標に掲げたのかわからない。

だいたい、それを口説き文句に、自分をここに引つ張り込んだのは、どこの誰なのか？

絶対に何があっても、香山にいればよかったとは言わせない、だから俺と一緒に宴会課を盛り上げてくれと言うから、ここへ来たのよ、私!! と全身で訴える。

ここまで憤慨を露わにする明日香も珍しかった。初めて見る者など、完全に固まってしまっている。

「まあまあ、そう怒らないで。これは上層部の決定だから。岩谷課長ばかりを責めないでやって」

すると背後から、岩谷を擁護する声が上がった。

相も変わらず、甘い声と口調。それらを裏切ることのない至高のルックス。その男は、このホテルの現場のナンバーワン、東宮だ。

振り返ると同時に、明日香の鼓動が高鳴った。

「東宮副支配人」

本来なら一社員を宥めるために休憩室まで入ってやることなど考えられない立場の者だが、東宮に関しては、いい意味で期待を裏切られる。

宴会課との交流も深いためか、ときおりこうして顔を出すのだ。

「オーナーサイドからの提案もあって、今後は和洋室ともに最高ランクのサービススタイルを目指して、こういう括りでのチーム作りもしてみようってことになったんだ。も

ちろん、他の部屋に支障が出ては困るから、場合によっては、デスクにかじりついているようなベテランも現場に引つ張り出す。私も現場に立つし、そういう配置配分でのオールウェーターだから」

彼の登場に、凍り付いていた室内の空気が、あつという間に穏やかで温かなものになつていく。

一部の女子の間では、ハートマークまで飛び散っている状態だ。目の輝きも変わっている。

それもそのはずだった。

東宮は今やこのホテルで、一番いい男の代名詞だ。

今年三十歳になる彼は、明日香が社員になる少し前に、ホテルのリニューアルに合わせて海外の一流ホテルから引き抜かれた超エリートのホテルマンだ。長身でハンサムで、言うまでもなく漆黒のクラシックタキシードと蝶ネクタイが似合っている。

女子社員・スポットが満面の笑みで「恋人にしたい」「寝てみたい」と掲げる男ナンバーワンだ。

ただし、「結婚したい男」になると五位ぐらいに落ちるのは、真に高嶺の花の証だろう。国内外の主要都市に支店を持つホテル・エストパレ・グループで、三十歳前に副支配人の席を用意されて引き抜かれてくること自体、異例だ。

恋人にするなら「素敵」の一言で済むが、夫になるとなったらそうはいかない。

憧れだけでは、妻の座は目指せない。

そんな現実を踏まえた女性が多いということなのだろう。

それにしたって溜息が出そうなほどスマートでハンサムだ。

一瞬前まで激怒していた明日香の口さえ塞ぐのだから、大したものだ。

これはもう、持って生まれた武器だ。

「なら、いいですけど」

他の部屋に支障が出ないとわかれば、これ以上怒る必要もない。

それに、東宮に憧れているのは、明日香も他の女性たちと変わらない。

特別に好かれてどうこうしたいという希望はないにしても、無駄に我を張り続けて嫌われてしまうのは避けたい相手だ。

それに東宮ほどのいい男ならば、それだけで出社する楽しみと活力をくれるし、彼の立場を考えれば、こうして気軽に声をかけてくれるだけでも、ありがたいこと。

攻めるときには攻めるが、引くべきときはきちんと引くのが明日香だ。

「わかってもらえて嬉しいよ。どのお客様に対しても最高のサービスを。このモットーが揺らぐことはないから、そこは信用して」

ただ、惹かれ始めて約半年。



明日香の中でいまだに憧れだけでとどまっているのは、やはり彼の隣にふさわしい女性には、極端に幅が狭いと思わせるからだろう。

特別綺麗か可愛いか。そう、ほどほどに綺麗とか可愛いでは駄目なのだ。

しかも、教養や品性も必要だろう。東宮貴道の恋人は、きつとどこかのセレブに違いない。それこそ、当ホテル自慢の宿泊八十万円のラグジュアリー・スイートに、お姫様抱っこで運ばれても不自然じゃない——そんな女性だろう。

「はい。わかりました」

それでも同じ世界で働いて、そして同じ高みを目指せる。

明日香にとって、ここでの同志、戦友というなら、昔から馴染みのある岩谷だ。

しかし、ついていきたい司令官となったら、彼、東宮貴道だ。

それほど半年前に起こった、大崎配膳の出入り禁止による配膳事務所側への一喝は、明日香にとって衝撃的だった。

あれは他の配膳事務所はもちろん、他のホテルの宴会課にも多大な影響を与えた。

あれから数合わせで放り込まれてくるスポットは、確実に減っている。

逆に、自社の登録員にしっかりとした教育を施し、売り込みに来る事務所が増えたため、どこのホテルの宴会課でも、胸をなで下ろしている。

今ではエストパレ・東京ベイの功績とも言われ、他社からも感謝されるほどだ。

「あ、でも東宮副支配人。今のお話からすると、今後作られていくだろう洋室の最高チームから女性を外されるってことですよ？ ここには女性であっても男性に劣ることのないサービスを提供できる人がたくさんいるのに、性別だけでそのチームからは外されるってことですか？」

だが、だからこそ明日香はあえてこんな質問も投げかけた。

もしかしたら、今度こそ嫌がられるかもしれないという不安はあったが、それでも言わないわけにはいかない。

なぜなら、ここには本当に力のある女性社員がたくさんいた。

スポットも、実力のある者が選ばれ、派遣されてきている。

中でも先ほど休憩室を出ていった凜子は、大学卒業後には香山配膳に入りたいと切望し、学生バイトながら和室スポットたちの中心として活躍している。

ここでの仕事で実績を作ろうとしているのだろう。明日香のたどったパターンとよく似ていることから、何かと話も合うし、相談にも乗ってきた。

仕事熱心で、向上心もあるだけに、性別だけで最高のチーム作りから除外されること、どうしても納得ができなかった。

明日香の問いかけに、その場にいた女性たちも、固唾を呑んで東宮の答えを待っている。

「いや、そういうことではないよ。実力は実力で、ちゃんと平等に評価する。ただ、和

室でおこなっている接客はすべて女性スタッフだ。だから、洋室に男性スタッフのみの接客体制があってもいいだろうっていう、まあ、こういう形も作って試してみようか程度を試みだから」

あからさまに「それって男尊女卑ですか」と問われて、東宮も少し苦笑している。

「もちろん、オールウェーターって表現になると、それだけで重さがあるからね。その呼び名に恥じないレベルのスタッフを育成するためには、やはり伊藤さんのように実力ある女性たちの協力が不可欠だから、率先して指導にあたってもらうことになるけど」

もらった返事に、これ以上の異論はなかったが、明日香は心から喜ばなかった。性格だから仕方ないとはいえ、この半年間を振り返ると、明日香が東宮と話をするときは、いつもこんな内容だ。

嫌われていても不思議じゃない。そう思ってしまう。

「エストパレ・東京ベイが目指すものは、決してAやSランクではない。やはりその上にある香山レベルと呼ばれる域だから。これで理解してもらえた？」

「はい」

つい強く向けてしまった視線を、いまからでも逸らしたくなってきた。が、さすがにそれは失礼すぎる。

明日香は返事をすると同時に、頭を下げることで、自分の目線を足元に逃がした。

「よかった。拗ねられたらどうしようかと思った」

「いえ、仕事ですから、それはありません」

東宮の顔を見ずに返事をしたものだから、ますます対応が素っ気なく見えてしまう。

「相変わらず手厳しいな——まあ、そこが頼もしくて好きなんだけどね」

「っ！」

明日香が思いがけない彼の言葉に驚き、顔を上げたときには、東宮は手を振りながら休憩室を去っていくところだった。

「伊藤。突つかかるなら俺にしとけよ。どんなに若くて取っつきやすくても相手は副支配人だぞ」

東宮は途中で声を落としていたので、周りには「相変わらず手厳しい」というくんだりまでしか聞こえなかったのだろう。岩谷など、すっかり青ざめている。

「すみませんでした」

周りの反応も岩谷と大差ないことから、明日香は「空耳だったのだろうか？」と首を傾げた。

それとも「好き」という言葉は嫌味としてあえて使っただけで、実際には「その男勝りをどうにかしろ。可愛げがない女は嫌いだ」と言い含められたのだろうか？

この状況から判断するならば、後者の可能性が大だ。

「怒るなって」

「怒ってません。落ち込んでるんですよ」

明日香にとつては踏んだり蹴ったりだった。

つい先ほどまで、浮かれていたことが嘘のようだ。

「は？ 落ち込む？」

「それより桜の間って、制服はともかく和装の備品はどうなってるんですか？ それってフルセットで借りられるんですか？」

とはいえ、仕事は仕事だ。気持ちを切り替えなければ、粗相に繋がる。

東宮に「仕事ですから」と口にしたのに、立ち直れないまま現場に入るなど、明日香にはできない。

他人に有言実行を求めるなら、まずは自分も。それが明日香のモットーだ。

「必要なものは揃ってるはずだけど」

「わかりました。では、準備があるのでお先に失礼します。あ、これ少し温ぬるくなってますけど、どうぞ」

心を切り替え、明日香は仕事の準備に向かった。

「あ、伊藤！」

わけもわからず、温ぬるくなったコーラをもらってしまった岩谷は戸惑うろたえばかりだ。だが、

ここでのやり取りが、二人の恋人説くわいを根底から覆くしたことは間違まちがいなかった。

「あーあ。よっぽど好きなんだな」

「ん。あんなにテンション下がった明日香さん、見たことないもの」

やり取りを見ていた者たちから見ると、岩谷は論外ろんがいに思えた。

しかも、全女子社員の憧れの的と言っても過言ではない東宮にさえ、あの調子、あの態度だ。

こうなると、明日香の優先順位のトップ争いは、Dドと仕事だ。

これでは明日香に、当分浮いた話はないだろう。そう、誰もが確信したほどだ。

「誰が誰を好きだって？」

「課長のことじゃないのは確かです」

「なんだよそれ」

もつとも、一番会話の多そうな相手が岩谷だけに、今後もこの手の噂は尽きないだろう。

明日香の機嫌が更に悪くなりそうだ。

こればかりはどうしようもないと、その場にいた者たちにはわかっていたが――

\*\*\*

一階にある休憩室をあとにすると、明日香は従業員専用の通路を猛進し、地下一階のクリーニングルームへ移動した。

ここではホテル内、全二百五十室で使われているリネン関係、宿泊客からの預かり品、従業員の制服一式、クロスや小物にいたるすべてのものが扱われている。

それこそ、いつ宿泊客から急ぎのクリーニングが出されるとも限らないため、二十四時間フル稼働の、ホテル内でも特にハードな現場のひとつだ。

「すみません。和室の応援に行くんで、着物一式お願いします」

明日香が入り口で声をかけると、すぐに中から「はい、どうぞ」と、着物制服一式を手にした男性スタッフが現れた。

洋服と違って着物にはサイズがないので、選ぶ手間もなくすんなりと出されたようだ。「これだけですか？」

しかし、手渡された一式を確認した明日香は、困惑しながら問いかけた。

どう考えても、足りないものがいくつかあるのだ。

「そうですね。草履はその棚にあるので、サイズの合うものをご自分で選んで、貸し出し帳に記入してください。それ以外に必要なものは自前ってことになっているので」

「……っ、わかりました」

明日香の言うフルセットと、岩谷が思っているフルセットでは内容が違っていたらし

い。

和室を担当したことがないから洋室の制服と同じように考えていたのだろうが、それでは困る。

自分が「行け」と命じる限りは、必要最低限の情報は持つていてほしい。

そもそも、制服が着られない」となったら、仕事にならないではないか。

(何がフルセットで借りられるよ。借りられるのは着物だけで小物類は全然ないじゃない。応援に行くのは構わないけど、さすがに和室に関しては事前に言ってもらわないと困るって、きつく言っとかなきゃ)

明日香は落ち込みから一転、静かに憤慨し始めた。

やっとの思いで気持ちを切り替えたのに、これでは意味がない。

だが、ここでごねたところで、無いものはない。

このホテルでは和室での接客をしたことがなかっただけに、自分も知識が不足していた。

こんなことなら凜子に聞いておけば良かったと、そこまで思い至らなかつた自分自身も腹立たしい。

(しようがない。あそこに縫すがろう)

仕方なく着物を抱え、草履を選んで手にすると、明日香はそのままエレベーターに乗

り込み五階まで上がった。

この階には、記念撮影用のスタジオや美容室が入っている。苦肉の策だが、美容室を訪ねたのだ。

「すみません」

「あら、どうしたんですか？ 明日香さん」

すでに美容室の中には、これから式を挙げる花嫁が五人ほどいた。

それぞれに担当者が付き、洋装、和装に合わせたセットをしている最中だったが、それでも比較的空<sup>す</sup>いていたことから、「この忙しいときに何の用？」という顔はされなかった。

これだけでも幸運だ。

「実は――」

申し訳なく思いながら説明すると、明日香は着付けに必要な小物類を借りることができた。

着替えもこの場でさせてもらい、髪型も作らせてもらう。

普段は後ろで一つに編み込んである長い黒髪も、和装に合わせて夜会巻きに変えると、それを見ていたスタッフが漆塗りの簪<sup>かざし</sup>までくれた。

そうして、仕上げにリップグロスを塗り直したら準備完了だ。

「わあ、がらりとイメチェンですね。明日香さん、和服がすごく似合います」

「本当ですか？ 嬉しい。なら、今日の仕事も頑張っちゃお」

「明日香さんったら」

「あ、でも本当にすみませんでした。あれこれお借りしたものの、終わったらすぐに返しに来ますから」

「そこは気にしないでいいですよ。こっちはいつでも大丈夫ですから、まずは粗相のないようにいつてらっしゃい」

「はい。ありがとうございます」

いい具合にテンションを上げてもらうと、明日香は美容室にお礼を言って、着替えた洋服や靴をしまうため、いったんロッカー室へ戻った。

その後、今日一日働くこととなった和室宴会場へ向かう途中、大広間の裏で少しばかり後ろ髪を引かれて足を止めた。

中を覗くと、華やかな装飾が施されたパーティー会場のステージ上には、那賀島建設創立五十周年記念祝賀会<sup>ケ</sup>の看板が掲げられていた。

主催者である那賀島建設の二代目、那賀島圭祐<sup>けいすけ</sup>は、まだ三十代半ばの男性だが、かなり知名度のある若社長だ。

バブル崩壊で傾きかけた会社を立て直し、その上投資事業や開発事業でも大成功を収

めて、今ではこのエストパレ・東京ベイの大株主の一人だ。

そんな縁もあって、このホテルの宴会場やレストランをよく利用する。しかも、独身貴族を謳歌おうかしているのか、現在の住まいはこのホテルのスイートルーム。それもエグゼクティブフロアに設けられた一室を月極げきぎゃくで借りているほどだ。

（そういえば、今日のオールウエーターはオーナーサイドからの要望もうんぬんって言うってたから、那賀島社長の意見が反映されたのかも。ものすごく商才も運も持っている人だから、上層部も言われるまま、ではやってみましょうって感じだったのかな？）

明日香は、会場を眺めながら、今日の経緯を自分なりに分析してみた。

（那賀島社長に気に入られて、〃D〃の曲もCMに採用、メガヒットに繋がったし。商才のある人って、結局何をさせても成功するのか……、と！）

フロアの中で忙しく動き回る東宮を見つけた。

（東宮副支配人。スタンバイから手伝いに来てるんだ）

立食パーティーなら千名、十人掛けを基本とする丸卓を置いた場合でも七百名は収容可能な大広間の中には、同じぐらいの年齢の黒服男性が何十名もいた。

だが、その中にもあっても、東宮は決して埋もれることがない。ルックスだけではなく、行動や仕草そのものがスマートだった。

年の頃からすれば、本来はまだ中間管理職。岩谷と同じぐらいの立場が普通だろう。

だが、明日香の目には二人が同じように見えたことは一度もない。

やはり東宮は上に立つ者であり、並々ならぬ存在感を持っているのだ。

絢爛豪華な装飾が施された大広間けんらんこうかにいてさえ、輝いて見える。

陣頭指揮を執っているのは岩谷だが、そんな彼を目線ひとつ、相づちひとつで動かしているのは、やはり東宮に他ならない。

人を動かす間や勘の良さは、天性のものだろうか？

それとも努力で身につけたもの？

明日香は、こんなところでもまた感心してしまった。

やはり東宮は、安心して付いていける上司だ。

このホテルが今後、彼の手腕でどう成長していくのか、楽しみで仕方がない。

自分がどれほど貢献できるかはわからないが、彼の目指すサービスを一緒に目指したい。

い。

少しでも助けになればという思いが、明日香の仕事意欲の源になっている。

もつとも、それだけにオールウエーターという言葉に嘔みついたのだが。

（今日は黒服が足りないから、自分も現場に出るって言ってたし、それでスタンバイから入って——あ、目が合っちゃった）

ジロジロ見ていたつもりはないが、視線を感じたのか、ふいに東宮が振り返った。

「あれ？ 変な顔されちゃった。さっきのこと、やっぱり怒ってるのかな）明日香は一応会釈をしたが、東宮は怪訝そうに首を傾げるばかりだ。（げっ、来た）」

しかも、何を思ったのか、仕事の手を止め、こちらへ足早に歩み寄ってくる。「あ、やっぱり伊藤さんか。びっくりした。別人かと思ったよ。これから和室？」 どうやら普段と違う明日香の装いに驚き、確認しに来たらしい。

この分だと、つい先ほど嘔みついたことは、根に持っていないようだ。東宮の顔には、いつも以上に笑みが浮かんでいる。

「はい。今日はオールウェーターになったので、向こうに回ることに」

「あ、そうだったね。いつも無茶ばかりでごめん。そのうち、この埋め合わせはするから、許して」

まだ、嫌われてはいなかった。

それがわかって、明日香は心から安堵した。

「それにしても和装か……、いいね。意外だったな、伊藤さんにこんな一面があったなんて。とくにこれ、漆塗りの簪なんて、普段から持ち歩いているの？」

それどころか、何が起こっているのだろうか？ 東宮は明日香の和装をべた褒めすると、利き手をスツと頬のほうまで翳してきた。

実際触れはしないが、耳の後ろあたりに差してあった簪を見ながら、感心してみせる。「いえ、これは美容室でもらったんです。少しぐらい飾り気があったほうがいいって言われて」

明日香の鼓動は一瞬にして高鳴った。

今にも爆発しそうだと一言でも過言ではないほど、ドキドキしている。

「そう。よく似合ってるよ。綺麗だ」

それは私ですか、簪ですか？

どちらにしても、予期せぬ褒め殺しはするんです。

そう言って、泣きたくなる。

「あ、ありがとうございます」

グロスで彩られた唇が、自然と震えた。

大広間からは、東宮を探す声が響いている。

「——おっと、行かなきゃ。じゃあ和室のほう、よろしく頼むね」

「はい」

東宮はすぐに大広間の中へ戻っていった。

（はあ……。びっくりした。東宮副支配人の彼女って、きっとああいうのを平気で聞き流せる人なんだろうな。綺麗だ——か。そんな言葉、簪使用とかサービスのときの所作

でしか、言われたことないわ)

明日香は高鳴る鼓動を静めようと必死になりながら後ろ姿を見送り、そしてその場を離れる。

(それにしても、いいなく大広間。いろんな意味で今日だけは外されたくなかった。Dも傍で見たかったけど、こうなると東宮副支配人のサービスが見たい。裏仕事でもいいから、そのままにしといてほしかったな)

説明はされたし頭では理解したが、やはり自分が「女だから」という理由で他へ回されたことが腑に落ちない。

各部屋のバランスを取るために、その日その日に配置変更があるのは当然のこと。

それは誰よりわかっているのだが、そのために「D」を見られなくなったのは仕方ないにしても、東宮の仕事が見られないのはなぜか悔しかったのだ。

(オールウェーターか)

女だから一緒に仕事ができない——どうしてか、そう言われているように思えて。

(ま。こればかりはしょうがないか。仕事、仕事！)

それでも、明日香は気持ちを切り替え、和室がある別棟へ向かった。

そもそもホテル・エストパレ・東京ベイは、ホテルを中心とした三十階建てのタワー

ビルと、テナントも入っている十階建てのサブビルの二棟からなっている。

メインのタワービルでは東京湾を望むオーシャンビューとなっており、主に洋式のサービスが、そしてサブビルでは四季折々の彩りが楽しめる日本庭園を売りにしており、和式にこだわったサービスが提供されていた。中でも一階部分に造られているメインの和室宴会場は、タワービルの大広間には及ばないものの、一卓八人セットで五十から六十卓を置くことができ、余裕で五百名近くが収容できる広さがあった。

畳敷きで示すならば約二百畳。襖で仕切れば二間、四間と分けられ、大小様々な宴会が行えるようになっていた。

また、雪見障子越しに四季折々の庭園を楽しめ、わびさびを感じる事が叶う、このホテルの自慢のひとつでもある。

だが、これはメインタワーの宴会場や他のホテルにも共通していることだが、平日は残念ながら、使用頻度が少ない。

明日香が応援に来たこの和室で、リニューアル前まで一番需要があったのは法要関係だった。

冬の時期は忘年会や新年会に利用されることも多いが、春先から秋口の土日・祝日に開くのは、圧倒的に法要後の食事会で使われることが多く、平日はあまり使われない。

この平日の使用度が低さから、必要な時に必要な分だけスポットが導入されるという



システムがホテル業界に根付いた。

配膳事務所の登録員で、圧倒的にアルバイトが多いのは、こういった背景もあつてのことだ。

よほどでなければ、専門になつても、継続した勤め先がない。

三百六十五日引く手あまたなのは、香山配膳の登録員ぐらいなもの、一見華やかに見えるホテル業界も実情はこんなものだ。

配膳事務所からのスポットなしでは、宴会課は成り立たない。

東宮がおこなつた大崎配膳への処罰が他社からまで評価されたというのは、背水の陣で下した決断だつたことが、どのホテルのスタッフも痛いほどわかつたからだ。

「失礼しまーす。応援に来ました」

「え？ 明日香さん。どうしたんですか、そのカッコ。綺麗！ 素敵！！ でも大広間は？ D はどうしちゃつたんですか？」

「今日の大広間は、オールウエーターになつたんですつて。だから私はラストまでこの応援。よろしくね、凜子」

「本当ですか！ 今日は欠勤が多いんで、誰か応援に来るとは聞いてましたけど、まさか明日香さんが来てくれるなんて。せっかく、D に会えるつて楽しみにしていた明日香さんには申し訳ないですけど、むちゃくちゃ嬉しいです。しかも、こんなに着物映え

する明日香さんまで見られたし」

「それ、本心？」

「本心ですよ。リニユールを機に、私は和室の専門になつちゃつたんで、もう二度と明日香さんと一緒に仕事ができないのかなつて思つてたんです。海斗や他の子たちからは、今日は一緒だつたとか自慢されるし………、すつごく悔しかつたんですから」

「ありがとう。そう言つてもらえると嬉しいわ。うん。本心に嬉しい」

エストバレ・東京ベイは、リニユールオープンをするにあつてこの和室を大改装、厳かな中にも雅やかな雰囲気強調して造り直したことで、今日のように披露宴でも使われることも増えた。

平日にも低価格でランチセットを導入した、貸部屋プランなどを新たに増やしたことで、以前に比べて三割は使用率が高まり、実益も上げていく。

だが、使用頻度が増えることよつて、問題が生じていることも確かだつた。

それは、スポットの中に凜子ほど着物で自由に仕事ができる若手がなかなかおらず、自然と年配の女性が多くなることだ。それ自体は問題ではない。が、この年配層を使いこなすのが難しく、若手の社員たちの悩みの種になつている。

そうでなくとも宴会課は肉休労働。和室の配膳にいたつては着物で動き回らなければならぬことから、洋室以上に体力を使う。

また、和装で動けるベテラン社員になると、宴会課よりは個人接客が主な和食処での需要が高く、大部分がそちらへ回されてしまう。

そのため、なるべく若手社員を鍛え上げてものにするというのが、上の方針だ。

「それにしても、さすがですね。普段から和装に必要な小物まで常備してるなんて。さすが、明日香さんです。ますます尊敬しちゃいます」

「まさか。いくらなんでも、そこまでは用意してないわよ。いきなり言われたから、慌てて美容室に借りに行ったんだから。本当、せめて前日に言ってほしいわ。だいたい、今時誰が、普段使いのバッグに、足袋だの着付け小物なんか入れてるのよ」

「でも、それで借りられちゃうところが明日香さんの顔の広さですよ。着付けや髪も美容室でやってもらったんですか？」

「ううん。それは道具だけ借りて自分で。あ、この簪は店長さんからのご厚意だけじゃね」  
「は。やっぱり香山はすごいですね。うちの事務所なんか、着付けできる人極貧ですよ。それこそ、介添えさんと登録してる人ぐらいじゃないかな？」

「そもそも、着物の需要が極貧なもの。仕方ないわよ」

今日の応援人員は和食処のベテラン社員が来ると思っていたのだろう、予想外の明日香の登場に凜子ははしゃいでいる。

レストランサービスと宴会課のサービスは、根本が違う。

どんなに着物で自由に動けるベテランであっても、宴会の流れを熟知していなければ、進行役には回れない。

そうなると、この場にいる若手の社員たちがベテランスポットだけではなく、ベテラン社員まで使わなければならないことになる。が、これがうまく行ったためしがない。

些細なことではあっても、毎回何かしら空気がよどむようなやり取りが起ころのだ。

いったい何が気に入らないのかわからないが、こればかりは、相性が悪いとしかいいようがない。

それだけに、凜子にとって明日香の登場は、神の降臨にも思えた。

どんなベテラン社員が回ってくるより、心強い。

なぜなら、社員だろがスポットだろうが、ベテランになればなるほど香山配膳の実力を知っている。

明日香の仕事に文句を言う者がいないのだから、本日の平和は保証されたようなものだ。のだ。

「それより今日の和室って何発入ってるの？ 一応進行表って見てもいいのかな？」

「今日は全部で三発です。あ、進行表を探してきますね」

しかも、こんなに急で無茶な応援要請にも難なく応える明日香を見て、凜子はますますテンションが上がったようだった。